NPO/ SORUCA 通信 冬 2020
NonProfit Organization/Soft Resouces of Urban and Country Association

会員　各位殿

令和2年11月30日

ＮＰＯソフトインダストリー研究会
理事　奥原 英彦

巻頭言

東京オリンピック「五色五輪の輪」・今昔

今年の10月10日は台風10号で大雨だった。56年前の1964年10月10日快晴、当時小学6年生であったが、明治神宮外苑（国立競技場）の上空に、5機の航空自衛隊機が描いた「五色五輪の輪」が広がったのを、今でも鮮明に憶えている。当時、自宅は杉並区の高井戸にあり、今思えば、「地縁・循環」型の生活を送っていた。その自宅は、大正期に建てられた典型的な武蔵野の借家借地で、農業を営む地主さんの畑と銀杏林に囲まれ、水道はなく井戸水を使い、畑に肥やしを提供する汲取り便所があり、畑で出来たキャベツや大根などの作物は、地主さんから分けてもらっていた。
更に、近所の家とは、家族的な「共助」生活を送っていた。夏の夕方になると、家族で夕食をお盆に載せて集まり、野球中継のTVなどを一緒に楽しむのが常であった。また、当時貴重だった電話が何故か我が家にあり、隣に住む妙齢のお姉さん宛に彼氏からの電話が我が家にかかってくると、いつも、お隣までお姉さんを急ぎ呼びに走らされるのが嫌だった。 このように、1964年東京オリンピック頃までは、江戸時代の農村的「地縁・循環・共助」社会が、山手線外延部には、まだ確かに残っていたと思う。二両編成の井の頭線に乗って青山の小学校に通学していたことで、高井戸（農村）と青山（都市）の違いを感じていた。友達の家に遊びに行くと、カルキ臭い水道水には閉口したが、便所臭くない水洗トイレで用を足せるのは快適であった。もちろん、近所には畑はなく、隣家との電話の貸し借りもなかった。青山に限らず、山の手線内側では、既に「地縁・循環・共助」社会は消滅していたと思う。通学しながら、国立競技場周辺の青山が写真で見る米国都市に変わっていくのを間近で見ていた。青山通りの拡張、並行して地下で進む表参道駅新設、国道246号に立つコンクリ橋脚の上の首都高速など、変貌する東京の工事現場の脇を通りながら、時々はこっそりと侵入しながら。そしていわば、風景が高井戸から青山に向かって猛烈なスピードで変わっていく、その時代感覚の「入口」が「五色五輪の輪」であった。
1964年当時、GDPは30兆円程度であったが、経済成長率は10％前後あった。東京オリンピック以降、経済成長とともに青山的都市が日本中で炸裂し、1968年には都市計画法なるものが登場。
その3年後、大学で都市計画を学び始める。急増する人口の受け皿として、都市化を制御しようとした。
しかし、その代償として、日本中の人口集中地区（DID）から「地縁・循環・共助」社会が姿を消してしまった。
地域の課題解決は、行政の責任になった。
一方、2020東京オリンピック。国立競技場は新しくなったが、56年前に変貌を遂げた青山の「街」の風景に変化はあまり感じられない。今後100年で、明治維新時の人口3300万人まで減少が予測される日本。
急速な人口減の中で役割を終えたかに見える都市計画。来年、また見るかもしれない「五色五輪の輪」は、どのような社会への「入口」になるのだろう。

SORUCA 通信　contents

■ 巻頭言　東京オリンピック「五色五輪の輪」・今昔　/　奥原 英彦
■ ガラパゴスはどっこい生きている
　～マスコミが避ける公社の亡霊～　/　奥原 英彦
■ スポーツを考える（スポーツと科学）　/　坂倉 海彦
■ コロナについて　/　白石　嘉宏
■ 編集後記　/　渡辺　勝範

ガラパゴスはどっこい生きている
～マスコミが避ける公社の亡霊～

奥原英彦

1. 高齢者が絶対に買ってはいけないもの

高齢者のリテラシーギャップを利用してお金を巻揚げているのは、何も「振込め詐欺」集団だけとは限りません。

高齢者向けの IT 学習支援行っている NPO 法人「川崎スマートライフ推進会」が、「絶対に買ってはいけない」携帯電話として指摘しているのが「らくらくスマホ」です。自由にアプリをインストール出来ない、強く押さないとスクリーンタッチが出来ない、ユーザインターフェースが通常のスマホと違う、そして何よりも高い。

「高齢者が一番使いやすいスマホですよ」とショップで薦められるので買ってしまったのが後の祭り。 今年の 9 月には、突然に「来週から LINE が使えなくなる。LINE を続けたければ、らくらくホンの新機種に買換える必要がある」との一方的な連絡が入り、慌ててドコモショップに駆け込む高齢者が多数出る騒ぎに。　マスコミは、多額の宣伝費をもらっているので、この事態は黙殺されました。

実は、この「らくらくスマホ」とは、1999 年から世界初の 3G 世代携帯電話ＩＰ接続サービスであった「i-mode サービス」を使い、天気予報、ニュースなどのアプリもどきのサービスをしているもので、通常の携帯とは「似て非なるもの」になっています。

簡単に言うと、いわゆる３Ｇガラ系携帯のサービスを今の４Ｇ携帯に潜り込ませ、高齢者に高く売りつけているもので、日本における横綱級ガラパゴス現象の１つである i-mode が、電電公社の流れを汲む NTT ドコモに、いまだに生きて高齢者を食い物にしていると言ったら言い過ぎでしょうか。

2. ２４時間都市を阻むもの

ニューヨークの地下鉄やロンドンのナイトバスが、終夜営業である 24 時間サービスを提供し、交通利便面において早朝や深夜の移動を可能にするとともに、経済面においてもナイトエコノミーを高めています。

一方、同様の国際都市を標榜する東京は、2014 年に廃止された都バス「深夜 01（渋谷 - 六本木）」などの試行はあったものの、ニューヨークやロンドンでは当たり前の終夜営業は未だに実現していません。さらに、コロナ禍の影響で終電時刻の繰上げが決まり、ますます 24 時間都市から遠ざかる傾向に拍車がかかってしまいました。

終夜営業が出来ない理由として、ニューヨークの地下鉄のように複々線化しておらず「線路や車両の保守・点検」に支障がある、ロンドンのように 24 時間の「人員確保」が出来ないなどを、鉄道やバス会社が言い訳としてあげていますが、それなら何故、事実上複々線運行

が可能になっている小田急線や、深夜空いている東名高速を使えば厚木や小田原にアクセスできる小田急バスで終夜営業しないのでしょうか。
それは、ターミナル駅である新宿や東京駅で接続する山手線が終夜営業せず、終電で止まってしまうからです。山手線を運行するＪＲ東日本に言わせれば、「需要がない」から終夜運転しない、大晦日から元旦は「初詣需要」があるから終夜運転するというのは、かなり苦しい言い訳と言えましょう。マスコミは、この苦しい詭弁も黙殺
金曜日の終電が満員で需要が顕在化しているなら、金曜日は終夜運転するのが理屈。また、保守・点検が安全運行に不可欠であるなら、大晦日から元旦の終夜運転は、安全性に反する危険な運行となり矛盾。
ＪＲ各社は民営化されたとはいえ、国鉄時代からの一部エリートによる「乗せてやる」独占専業の思想が生きており、時間に正確で安全で速いスピードでの運行には異常な関心はありますが、新幹線内での自販機販売すら提供しないなど利用顧客の利便性には殆ど関心を持ちません。このため、京浜東北線や埼京線などと併せれば、事実上複々線化している山手線の終夜営業については、需要があっても実現させる検討すらしてないのが現状です。国鉄時代からの「鉄ちゃん」ガラパゴスが、24 時間都市東京を阻んでいるのです。

３．ガラパゴス化の功罪

ガラパゴス化とは、進化論におけるガラパゴス諸島における生態系になぞらえたもので、国や地域で独自の進化を遂げた結果が、国際化の中で適応性や生存力に劣り、やがては淘汰されるというプロセスであります。
前項の「らくらくスマホ」や「東京の山手線」を「悪例」としたが、中には、海外に同類のマーケットがないため、国内での標準仕様（サービス）になっているものもあります。
例えば、非接触型ＩＣカードで採用されている電子マネー「FeLiCa（フェリカ）」や、国内発売の自家用車には必須の「カーナビ」などは、国内では圧倒的な利用率を誇っているものの、海外では過剰性能や不要システムと見なされて普及していません。
かつては、i-mode は国民の 4000 万人以上が利用し、海外での普及が試みられたことがあり。また、カーナビも、その考え方がスマホの地図アプリに導入され始めています。
このように、ガラパゴス化は、それぞれの国における独自の背景や歴史、国民性の下で進化した形態であるが故に、必ずしも、悪いとは言えないプロセスであり、むしろ、ポケモンのようなゲーム、アニメやコスプレなど、ある種のグローバルスタンド化する中で、外貨稼ぎに一役買っているものも多いのが事実です。
では、何故、「らくらくスマホ（高齢者への不当推奨）」や「東京の山手線（24 時間化の黙殺）」が問題なのか。それは、電電公社や国鉄が 「国営」として「独占専業」する中でガラパゴス化したため、約 30 年前に民営化されたはず。そのＮＴＴやＪＲ各社が、世独占専業思考に基づく「厚顔無恥」なガラパゴス化（サービス）をいまだに続けており、 監督官庁である総務省や国交省が、世界の潮流に背を向け、その問題点の指摘すら出来ていないからです。
以上

スポーツを考える（スポーツと科学）

坂倉海彦

狩りや採収をして生きていく動物は必ずと言ってよいほど餌を確保するための縄張りをもつ。そして縄張りを守るために同じ社会を作っている群れが協力して他の群れとの縄張り争いをし、時には殺し合う事も起こる。これはヒトも同じであり、競争の中で生きていく動物に備わる本能としての戦いに明け暮れて来たのであろう。自然界の秩序の中でしか生きる知恵のないヒト以外の動物は、いくら縄張り争いをして時には同じ種同志で殺し合う事があっても犠牲者数は全体の個体数から見ればわずかなもので、縄張り争いの殺し合いが種の滅亡につながることなどありえない。然し動物界で脳が異常に大きくなり文明や文化を生み出すようになったヒトの争いは深刻になる。生きる本能を超えて大きな欲望を抱くようになり、強力な武器や殺す技術を次々と開発してきたヒトは次第に己の生み出した戦いの規模の大きさやその被害の激しさを看過できなくなった。そこで他の群れとの共存をする社会を作る知恵を生み出し、そこから政治や外交、契約といった事を学ぶようになった。ヒトが動物である以上どうしても戦おうとする本能から逃れることはできないが、本能のままに戦う事が人類という種を維持していくうえで大きな問題になって来た。ヒトは何かにつけて戦いたいのだが、欲望のままに戦う事が正当化しにくくなって来た時に、戦いを遊び化する手法、文化としてのスポーツの原型が誕生したと考えてよいのであろう。

20 世紀になってからの悲惨な戦争体験は、本能のままにヒトが戦うと、自分の所属している種全体（人類）を滅ぼしかねないという状況を創り出してしまった。こうなると本能のままに戦うエネルギーを吸収する何かが必要になり、その一つとしてスポーツに大きな役割が期待されるようになって来たのではないだろうか。古代ギリシャでは宗教行事であるオリンピア祭典の期間は戦いを休止しなければならず、祭典中にスポーツの原型のような競争や格闘競技が行われていた。人類は３０００年近い大昔にスポーツを採り入れた祭典を生み出し、一時的に戦争を中断するという知恵を発揮し始めたのである。そして１９世紀末に近代オリンピックが誕生し、平和の祭典としてのオリンピックを制度化したのであるが、それでもオリンピックはナチスドイツや社会主義圏の国力顕示と国威発揚の場として利用されてきており、ある意味ではスポーツは国家間の戦いの片棒を担がされ続けてきたし、現在でもそのような要素は多少なりとも残っている。しかしそれでも武力での国家間や民族間の戦いを、スポーツでの国や民族間の戦いにより昇華する事が出来れば、その方がはるかにましであるという考え方に異存のある方は少ないであろう。

スポーツがヒトの戦いたいという本能から離れ文化の一つとして定着してくると、それまでとは異なる要素が求められ始める。例えば２０世紀中盤頃までのスポーツは、激しい運動を伴う競技や種目を中心に男子に限定されているものが多かった。戦いたい本能を持つ戦士

がスポーツ選手であり、必然的に男子主体だったのである。然しスポーツに楽しむことや栄光を求めること等の要素が強くなってくるに従い、世界の人々の価値観が反映されるようになってくる。男女平等という価値観の一般化は殆どの競技種目に女子を加えるようになった。そして最近話題になった大坂なおみ選手のマスクへの表記による人種差別反対のメッセージの世界中への発信など、スポーツが次第に戦いを離れて人類としての正義が何であるかを訴えるようになってきているように思う。今や世界中の人々がスポーツをしたり楽しんだりする権利を持つと言う理想的な世界をスポーツから始めようとしているかのようだ。パラスポーツも身体に障害のある人もスポーツに参加できるようにするという素晴らしい理念が基礎になっているのであろう。

このようにスポーツが文化として定着し、人類共通の願いを共有する場としての発展をする一方、戦いに勝とうとするアスリートの本能が失われることは無い。そうなると競技力向上のために従来以上の強力な武器を持とうとする。科学技術が普及してきた近代以降は競技力向上にも科学技術を持ち込もうとするのは必然であり、練習やトレーニング方法を科学的に改善することから始まり、次第に薬物で身体機能を向上するようになり、いずれは遺伝子レベルからアスリートの身体や精神を作り替えようとするかもしれない。このような薬物使用は古代オリンピックでの興奮剤の使用から始まり、19 世紀後半には水泳、自転車、競馬などで麻薬や興奮剤の使用が発覚し死亡者も出たようだ。然しこのような薬物使用を検出する技術もなく統制されなかったが、薬物検出技術が確立し始めた１９６８年のグルノーブルとメキシコシティーのオリンピックで初のドーピング検査が取り入れられ、９９年にはＷＡＤＡ（世界アンチドーピング機構）が設立、次第に世界基準が確立されるようになった。つまり禁止されている薬物使用はドーピングとしてスポーツのフェアプレイ精神に反するとして禁止されるようになったのである。然しその後は広く報道されているように、より強力な薬の開発とその検出技術向上の「いたちごっこ」が続いており、ここにも国際政治の介入が垣間見られるようになってきている。スポーツが科学技術を導入する事により画期的に競技力が向上し、スポーツの世界が拡大し大きな経済効果を生むようになったが、スポーツと科学の関係がどうあるべきかについての議論やコンセンサスは十分に生れて来ていないように思う。

またパラスポーツの理念は素晴らしいが、パラ競技を成り立たせるためには競技のルールなどの他に、喪失した身体的能力を科学技術の助けで補わなければならないという側面もある。人間の身体能力は様々な科学的トレーニングなどによって大きく伸びるとしてもやはり限界があり、とても無限だとは考えにくい。然し科学技術の可能性は無限大に近い。そうなるといつの日か、人間の足で走るより義足で走る方が速いので健常な足を切断して義足で走ろうとする本末転倒なパラスポーツ選手が出てくるかもしれない。最近のニュースでパラ選手として認定されるために、障害のある自分の足を使うより足を切断して異なるカテゴリーの選手になることを本気で考えているというパラリンピアン候補選手の事を知った。既にスポーツと科学の問題はそこまで深刻な状況になっているのだ。

１９世紀末にクーベルタンはスポーツと戦争、スポーツとカネについての新理念を生み出し、２０世紀にこれをベースに変身して来たスポーツが今ある。２１世紀のクーベルタンはスポーツと科学についての理念を打ち立てなければならないのではないだろうか。

コロナについて

　コロナがこんなに長引き、その上 11 月ぐらいからはインフルエンザのシーズンに入るのでこれと第二波が重なったら大変なことになるとマスコミは報道を繰り返しています。この報道を受けて後期高齢者の私は優先的に予防注射が無償で受けられるので近所の指定医に行きました。普段流行っている医院ですが思いのほか空いていました。 私は不整脈があるので東京医科歯科に通っていますが此処もコロナ以前から比べるとかなり空いています。
日本では 1 日の感染者が 500 人前後で推移。一方アメリカ、インド、ブラジルは大流行ですがヨーロッパも大変な勢いで感染者が増えているとのことです。
その中にコロナが流行の兆しを見せた時にマスク着用の強要もロックダウンもしないスエーデンがかなり非難を浴び、スエーデンは失敗したとの論評も多く見ました。しかしヨーロッパで大流行の中、近頃スエーデンについての報道が見当たりません。この稿を皆さまが目にするときはどうなっているか判りませんがスエーデンについての報道を探したところ 10 月 9 日の BS1 の報道を見つけました。内容を紹介します、「緩いコロナ対策で当初、他の北欧諸国に比べ多くの死者が出ているなどとして厳しい批判を受けてきたスエーデン。だが、現時点では大きな感染の拡大は見られず、これまで通りの日常が続いている。経済の落ち込みも GDP4,6% の見通しで打撃は比較的抑えられたという見方も。WHO やこれまで批判してきた欧米メディアでも評価する論調が出始めている」。とのことです。当初死者が多かったのは老人が暮らす施設でのクラスター感染でした。また、スエーデンでは老衰により自分で食物を呑み込むことが出来なくなった時点で食事を強要することをしない、日本のように最善の医療を施すことが医者の義務として点滴や胃漏を行いますが、スエーデンでは自身の生きる・生きようとすることに対しては当然ケアしますが、ケアはそこまで。
　コロナ感染者を放っておけということではありません、重傷者には ICU に入ってもらい ECMO（エクモ）での治療で対応し命を救う努力が求められます。
問題は、この ICU に収容しなければならない人が介護する医療者の対応能力を超えないようにすることで、そこが担保出来たらあとは無理な規制は行わない方が良いと思います。すでにコロナにより生活苦、先々の見通しが立たないともことから自殺する人も出て来ました。企業の倒産、失業も深刻な状況です、結果今では GO　TO 何々だらけになり、経済優先に舵を切りました。

　さて、現状の対応の陰で経済とは異なる弊害が出て来ています。一つは次代を担う学生の生活と対面教育が出来ない弊害です。4 月から一度も教室に入っていない、勉強も友達

も出来ないバイトも出来ないから経済的に何時まで学生を続けられるかという声も出て来ています。先々の就職も不安です。
もう一つ此処にきてさらに大きな問題として、5 月から 7 月の妊娠届が 11,4% 減少しているとのことです。昨年の新生児は 86 万人台とその少なさに大変な衝撃を与えましたがこのまま推移すると 70 万人台になる可能性も出てきたとのことです。 東京都も 19% 減最も落ち込みの大きいのが山口県で 29,7% です。 理由はコロナに妊婦が罹患することの恐れはもちろんですが出産に対して感染防止のために立ち合いが出来ない、見舞いが出来ない、帰省を伴う里帰り出産が難しい､そうして雇用情勢が厳しくなるのではないかとの不安もあるとのことです。

コロナに感染しても命が失われないよう医療体制の充実を図った上でのことですが、私はスエーデン方式で集団免疫方式が過去の人類生存の歴史から見ても妥当ではないかと思います。すでに子供が罹患するのが家庭内が一番多いとか、ここにきて運動部内での寄宿舎での集団感染、阪神タイガースの会食による集団感染の報道に接するとすでにコロナウイルスは何処にでも普遍的に存在していてたまたま濃厚接触の機会に罹患したとみる方が普通ではないかと思います。返ってコロナを恐れて隔離、三密を避けるということを続けると何時までも今の状態が続くのではないかと思います。実際過去の SARS (重症急性呼吸気症候群) や MERS（中東呼吸器症候群）などのウイルス感染症は集団免疫状態になったと判断されたときに収束に向かっています。

大体私達人類はこの地球上では新参者です。ウイルスも、細菌も私達より前に存在しています。一番わかり易いのは近年腸は第二の脳などと言われ細菌が密集している腸が私たちの思考や行動に影響を与えているという番組が出て来ています。私達は私達以前に存在していた細菌類が腸に居てくれるから食べ物の消化が出来るのです。太り易い人、食べても食べても太らない人が居ますが、それはその人が持っている腸内の菌に拠ります。肥満者を痩せさせる方法として最近は痩せた人の腸管の菌を太った人の腸に移植する方法で成果を挙げています。腸と同様に問題は私たちの生活空間の菌・ウイルスのバランスが適度に保たれていること、それが崩れた時にはなるべく早くその外来者を受け入れ新たなバランスを構築することです。

地球規模では人口が増え続けています。今まで人が入り込まないようなところにも人は開拓して入って行きます。今まで耐性のなかったエボラ出血熱などが現れます。国際化グローバル化で人の移動が拡大を続けています。16 世紀アメリカに居たネイティブの人達はヨーロッパ人が持ち込んだ、と言ってもヨーロッパ人は健康に普通に暮らしていたのですが彼らが持っていた細菌に対する抵抗力がなかったので、ヨーロッパ人との戦闘よりも細菌により多くの死者が出ました。

これからの時代、新たな土地の開墾、人の移動が今まで以上の規模で行われます。
知られていないウイルスや細菌が出て来るでしょう。その時に今回のコロナ騒ぎの経験を生かして最小限の犠牲者で済む方法の下、集団感染へ移行することです。

白石　嘉宏

<編集後記>

定年退職をしてすぐ、かねてからの念願であった、天風会の夏期修練会に参加した時のこと、班の座談の中で健康の問題もなく、事業に失敗した訳でもないのに 何故参加したのかと問われた。その後日曜行修に毎週護国寺に通ったが、仲間入りはできなかった。この夏、心不全から腎臓肝臓が不全となり、３日間の透析と４０日間の入院ではじめて、死と向かい合いました。体力の回復に合わせて、書斎の片付けをはじめました。手紙類、書類がおわり、書籍の処分です。中村天風も安岡正篤も森信三も書棚から消えました。（渡辺）

SORUCA のホームページの画面です。
https://soruca.org/

「特定非営利活動法人ソフトインダストリー研究会」
広報誌
SORUCA 通信 (2020年　冬号)

発行責任者　白石　嘉宏
発　行　所　NPO ソフトインダストリー研究会
東京都新宿区矢来町 47 番地
FAX: 03-3266-1764
https://soruca.org/
編　集　人　渡辺　勝範・長谷川　毅
発　行　日　2020年11月30日

NPO/ SORUCA
NonProfit Organization/Soft Resouces of Urban and Country Association
発行元 :NPO ソフトインダストリー研究会